

## 統一テーマ「ロマンス諸語におけるコロケーション・成句」

秋廣尚恵（とりまとめ）

### 1. はじめに

日本ロマンス語学会第 57 回大会の統一テーマは、「ロマンス諸語におけるコロケーション、成句」であった。この枠内で、九州大学の蔦原亮、西南学院大学院生の吉武大輝、千葉工業大学の木島愛、東京外国語大学院生の古賀健太郎の 4 氏が研究発表（持ち時間 20 分）を行った。また、統一テーマに関連して、パリ第三大学の Jeanne-Marie Debaisieux 氏の講演（持ち時間 50 分）が行われた。その後、総合討議として統一テーマに関する研究発表、及び講演に関するパネルディスカッション（45 分）が行われた。

蔦原はスペイン語の軽動詞としての *echar* の機能についてコーパスに基づく計量的な調査を行った。吉武は、フランス語の *arriver* の共起語の拡大について通時的な観点から分析を行い文化化のプロセスについて論じた。木島は、日本語とフランス語の視覚を表す動詞を例に挙げつつ、対照言語研究における語彙文法理論の可能性について論じた。古賀は、フランス語の *qui dit A dit B* という成句的な表現について、その内部を構成する要素の範列や連辞的組み合わせにある程度の自由度が認められることを指摘し、凝結表現には完全には至らない成句が持つ独特のステータスを明らかにした。また、Debaisieux はフランス語における *si* や *quand* によって導かれる従属節の独立的使用の具体例を分析し、これらの表現が、談話的コンテキストの中で習慣的に用いられて定型化することで、発話内効力を持つ独立した発話として機能すると論じた。

### 2. 総合討議と質疑応答

以下に総合討議のもととなる研究発表の要旨と討議の概略を示す。

#### (1) 蔦原亮 「軽動詞としての *echar* -コロケーションの観点から-

スペイン語動詞 *echar*（「投げる」「注ぐ」「加える」）には *hacer*, *dar*, *tener*, *tomar* と同様に、軽動詞としての機能があることが文法書、先行研究で指摘されている。しかし軽動詞としての *echar* を議論の中心に据えた先行研究は数少なく、その使用の実態が明確に説明されているとはいえない。そこで、軽動詞としての上記五種の動詞の特徴的なコロケーションを比較・分析することで軽動詞 *char* の使用の実態と固有性を考察した。分析対象として、logDiceスコア4.5以上の強度で結びついている各軽動詞と事象を表す目的語のコロケーションを使用頻度とともに *eseu Ten Ten 11* コーパスから収集した。そして得られたデータから、五種の軽動詞の使用頻度が、*hacer* 26 : *dar* 14, *tener* 5 : *tomar* 3 : *echar* 2 で分布していること、収集した軽動詞 *echar* の 41,063 の用例のおよそ 73% が「見る」動作を表す四種類の名詞を目的語としたものであることを明らかにした: *vistazo*, *mirada*, *vista*, *ojeada*。Echar は「見る」動作を表すことに特化した軽動詞であると説

明した。また、イタリア語やポルトガル語に比べ、スペイン語では「見る」動作を表す際に *echar* が多用されているが、前者の2言語ではむしろ *dar* を用いることが多いという違いがあることを指摘した。

総合討議では目的語との共起の他、与格との共起を見るとより興味深い特徴がみられるのではないかと指摘があった。さらに *echar* の語彙的本質的意味と軽動詞としての意味の連続性、授与動詞的な用法などについて議論になった。

## (2) 吉武大輝 「フランス語の移動動詞 *arriver* における共起語の種類を通時的変化と文法化」

フランス語の移動動詞の一つである *arriver* は「対象」と「着点」を必要とする二価作用動詞であり、主に、「移動」、「可能・生起」、「散発」の用法がある。*Arriver* の用法を体系的にまとめた先行研究には、共起する語句の性質を基に構文を共時的に分類した文献は見受けられるものの、その分析対象は現代フランス語であり、通時的分析がなされていない。歴史的には、現代フランス語の *arriver* は、ラテン語の *ad ripam* が口語的に動詞化された中世ラテン語 *adripare* に由来する。古フランス語では、表記は *ariver* であり、意味は *mener à la rive* であったが、時代が進むにつれて行き先が *rive* だけでなく、*port* や都市名をとるようになった。一方、「生起」を表す際には、*venir* の派生語 (*advenir, survenir*) が使われた。また、*ariver / arriver* が比喩的に用いられることで、可能用法や生起・散発用法などのモーダルな用法を獲得したと考えた。本発表では、先行研究にて提唱されている構文分類を基準にすることで、*arriver* の共起語をフランス語史に基づいて区分した時代間(古フランス語期・中世フランス語期・近代フランス語期・現代フランス語期)で比較し、共起語の種類拡大から、*ariver / arriver* の比喩的使用の広がりや文法化の過程を明らかにする。また、文法化の認知プロセスを探り、構文のネットワーク化を試みた。総合討議では、とりわけ比喩化のプロセスと多義化の問題について議論となった。

## (3) 木島愛 「多言語対照研究における語彙文法理論の可能性—フランス語と日本語の視覚を表す慣用表現を例に—」

日本における「慣用句」に関する歴史を振り返ると、その概念整理が本格化したのが1970年代以降であり、90年代以降には認知言語学分野で慣用句を意味論的研究が活発になった。近年では様々な分野で、意味論的な分析に加えて統辞論的分析の両方を考慮した慣用句の研究が行われている。フランスにおいても変形文法によって自由文と慣用句が区別されるようになり、近年、フランスにおける慣用句研究は盛んであり「語彙文法理論(*lexique-grammaire*)」が有力な分析概念の一つとして多くの研究者に受け入れられている。この概念はロマンス諸語を始めとした他言語との多言語対照研究の基準として適用することができ、実際にスペイン語とフランス語の対照研究の中でも使用されている。日本語と他言語の対照研究について見てみると、特に動詞的慣用句の比較は、英語や中国語、ドイツ語、ロシアでは行われているものの、フランス語を始めとするロマンス諸語との比較はほとんど行われていない。本発表では、「語彙文法理論」を用いてフラ

ンス語と日本語の動詞的慣用句の対照研究を行うための第一歩として、「語彙文法理論」の有効性をフランス語及び日本語の視覚を表す動詞を用いて検証する。語彙文法理論における分析基準と近年の日本語慣用句研究の基準との相違点を明確にし、具体例を用いて比較し、フランス語と日本語の慣用句の特徴について論じた。

(4) 古賀健太郎 「固まりきっていない成句の位置づけについて：フランス語の« qui dit A dit B »を中心に」

本発表ではフランス語の*qui dit A dit B* (Aと言えBである) という表現において、構成素の組み合わせに一定の自由度が認められる点に着目し、その生産性の高さや成句としての位置づけを、Booij (2010)をはじめとする語彙素ベース (lexeme-based) アプローチに基づいて検討した。フランス語における生産性の高い成句表現については主に構文文法の枠組みでさまざまな検討が成されているが、個々の構造が語彙と統語の連続体の中でどのように位置づけられるのかについてはあまり注目されていない。一口に成句と言っても、実際にはコロケーションとしての自由連辞に近いものから凝結文に限りなく近いものまでさまざまな表現が存在する。しかも凝結文由来の構造だからと言って、その構造の生産性が低いとは限らない。こういった点を考慮する必要性を本発表では主張した。考察に当たってはまず、インターネット上で観察される例を基に、*qui dit A dit B* の A と B の部分に入る要素の統語的特徴および意味的傾向について分析した。その中で、A と B にかかわる語彙的な選択にとどまらない、内部構造のさらなる操作の可能性についても言及した。そして「構成素組み合わせ自由度の高さ」と「統語規則からの逸脱性」という観点を基に、フランス語の他の成句表現との比較を通じて、本表現の成句としての位置づけを明らかにした。

(5) Jeanne-Marie Debaisieux « Les subordinées sans principales : ellipses ou routines discursives ? »

(「主節を伴わない従属節：省略、あるいは談話的な習慣?」)

本講演の目的は以下の例に見られるように、従属節の形式を取りつつも、統合されるべき主節を持たない構文のタイプを分析することである。こうした構文タイプは、フランス語では、書き言葉にも話し言葉にも観察される。(以下の例のイタリックの部分)

1. 母親が娘の仕事について話している例

*bon ben ils font des trucs // si tu savais ce qu' elle fait / elle fait plein de stages / elle fait euh assistante de metteur en scène* (現代フランス語参照コーパスから引用)

2. 羊育業者が子羊の売値の変化について不満を述べる。

*quand tu penses que euh en 1978 + 80 / 82 l'agneau on le vendait 34 francs le kilo à la carcasse* (現代フランス語参照コーパスから引用)

こうした例は Evans(2007)では、「非従属節化 (insubordination)」として記述されてきたものである。

Debaisieux 氏は、こうした例を様々な統語的テスト (à mon avis や tu sais などのモダリティ要素を付加することができるか否か、si tu savais の後に間接感嘆文 ce que 以外の従属節のタイプが来ることが可能か、quand tu penses の後に sérieusement などの副詞を挿入することが可能か、penser 以外にどのような動詞が来ることができるかなど) を利用して分析した。そして、これらの例では、談話における習慣化によって、節の内部を構成するそれぞれの要素の範列が制限され、連辞が定型化することによって、それ自身が、決まり文句として独立した発話行為を構成する単位となったと結論づけた。総合討議では、日本語における「言いさし」表現との類似性が指摘されたほか、非従属節化や文法化の枠組みで現象が説明できるのではないかと指摘もあった。後者の指摘について、Debaisieux 氏は、談話的習慣がもたらす語用論化は考えられるが、文法化という分析については、懐疑的であると答えた。

### 3. まとめ

今回は、統一テーマである「コロケーション」という切り口から、スペイン語、フランス語に関する発表、講演が行われた。時間の関係もあり、各発表の後に、質疑応答に十分な時間がさけなかったことに加え、総合討議ではいくつかの発表、講演についての質疑応答や討議が集中してしまった結果、他の発表についての質疑応答や討議が十分に行われなかった。この点はひとえにとりまとめ役である筆者に責任がある。そのような反省もあって、ここでは、議論であまり言及されなかった研究へのコメントも加え、まとめてみたい。

まず、コロケーションと一口に述べても、内部構成要素のそれぞれの範列における選択自由度と連辞的組み合わせの自由度が完全に失われているわけではなく、ある程度の生産性は残されているという点を忘れてはならない。古賀の共時的な現代フランス語に関する研究はその点を詳細に記述している。コロケーションと完全に固定化された凝結表現 (フランス語の *hocher la tête* など) とは区別されるべきであると考えられる。

コロケーションには、ある特定の語彙と構文との共起性があり、また頻繁に使用される用法の中での意味の比喩化が往々にして伴う。その点で葛原の研究が興味深い。さらに、これに関連して、理論的観点から、木島の語彙文法的観点からの視覚動詞の分析が行われた。フランスでは 1980 年代から、動詞価理論の延長上に、Harris 的な分布主義を取り込み、語が現れる分布的特徴を記述する理論的枠組みが生まれたが、木島の紹介する語彙文法もその系譜を引くと考えられる。さらに、最近では、構文化文法の影響もあり、用法内での語どうしの結合可能性を云々するだけでなく、構文それ自身が語彙に課すカテゴリー的意味や構文間のネットワーク (Willems 2012) を記述する研究が盛んに行われている。木島の述べるように、語彙に関わる文法制約や構文的枠組みは各言語に固有のものであり、その類似点や相違点を記述することは日本語とロマンス語の間ではあまりなされてこなかった。単なる翻訳的な対照研究ではない、理論的枠組みを持った研究が今後期待される。

コロケーションの成立は用法の変化を伴う。この点に関しては、吉武の *arriver* の通時的研究はよい例証となる。*arriver* は結びつくべき要素の多様化により、拡大的文法化を起こし、現在のような多義性を獲得したと考えることができる。一方、Debaisieux の取り上げた、*si tu savais* 節や *quand je pense* 節のように、内部構成要素の範列的、連辞的制約のある例については、主節の省略による非従属節化が起こったとする Evans の説明よりは、むしろ談話的に習慣化して見られるコロケーションの一種として、凝結し、一部が固定的な成句となり、語用論化した意味を有し、「感嘆」というモダリティ的価値を有する発話として独立的用法を持つと考える方が妥当であるように思われる。